



石の道具に柄がついた

石器時代の大発明！！石斧に柄がついた。手で持って石で叩くのには力の限界があり、大きな力を出すことは体力との勝負でした。しかし、誰が発明したのか？柄をつけました。テコの利用で小さな力で大きな仕事ができます。

柄と平行向きに石を付け斧やヨキとして、又、直角方向につけると鍬（くわ）や手斧（ちょうな）になりました。用途が開発され、それごとに工夫された道具は、木工用具として斧や手斧、農具として鍬が生まれます。それらの道具を作る工具として石の槌や石斧が活躍しました。

縄文時代、石斧は専門集団が作ったのではないかと思われる遺跡が九州で発見されています。（福岡市西区、今山遺跡）玄武岩の石斧で加工途中のものが沢山出土しています。

石斧 刃をつけた石器は、あんがいによく切れるものである。20世紀後半の今日でも、いまだに石器時代のまどろみのなかにとどまっているニューギニアの高地の村に入りこんで、生活をともにしてきた私（飯沼二郎）の友人が、そこから、磨製の石斧をもちかえてきた。ハマグリ型の青い石を、両面から磨いて刃をつけ、木にはめこんだものである。どのくらい切れるか、ひとつ、ためしてみようということになって、京都市の東にある大文字山にのぼって、松の木を切ってみた。直径20センチほどの幹を切るのに、約10分間であった。ニューギニアの高地人であれば、3分ぐらいだとのことである。

新石器時代になると、人類はまた、土器をつくりはじめる。壺の形にして、火で焼く。そして、同時に、農業が開始されることになる。だから、磨製石器と土器とがあれば、そこに農業があると考えて、まず、まちがないというのが、考古学の世界の常識である。（農具 飯沼二郎 より 抜粋）



石斧柄
装着復元



むらの鍛冶屋®



何でもお気軽にお尋ねください！！

参考図書

農具	飯沼二郎	堀尾尚志	法政大学出版局	1996年
古代日本の知恵と技術	森	浩一 編	大阪書籍	1983年
海が語る古代交流（はかた学3）		朝日新聞福岡総局編	葦書房	1989年
神戸考古百選	神戸市教育委員会			1999年

会社の住所表示が10月20日より変わりました。
新しい表示は以下です。
お手数ですが住所録をご訂正ください。

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>

<http://www.kanamonoya.co.jp/>

672-8039 姫路市飾磨区阿成渡場 1111 e-mail ryou@memenet.or.jp